

甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

No. 108 December 1994

日本未記録のジョウカイボン2種*

高橋和弘

過日、筆者は滝沢春男、芳賀 馨および柴多浩一氏らから、多数のジョウカイボン科の標本をいただいたが、その中に日本から未記録の *Podabrus* 属に含まれる2種（いずれも北海道産）が見い出されたので、全形図ならびに交尾器の図を示し、ここに報告する。標本をいただいた各氏には心よりお礼申し上げる。

Podabrus (Podabrus) angusticollis MOTSCHULSKY, 1860

タカネクロクビボン
ジョウカイ (和名新称), 図1, 3.

MOTSCHULSKY, 1860. in
Schrenck, Reisen Amurl,
2: 117.

体長: ♂6.7-8.1 mm,
♀8.4 mm. 体幅: ♂1.7-
2.0 mm, ♀2.2 mm.

体全体が黒色のややスレンダーな種で、前胸背の幅はやや狭く、基部両側に縦状の隆起が顕著に認められ、中央にも低い縦隆起がある。爪の形状は、雄では左前肢のみが2裂状で、その以外は基部が三角形にふくれる。雌ではすべての爪の基部が三角形にふくれる。

前肢の爪の形状が左右で異なる種は、*Podabrus* 属からは知られておらず、従来の爪の形を重視する分類法からすれば、別亜属を作って含めなければならないところである。しかし、本種にきわめて近縁と考えられる次種のエゾクロクビボンジョウカイの爪の形や、後述する交尾器の特徴等から判断すると、爪の形状の左右の相違はむしろ例外的な現象と考え

られ、恐らく本種は *Podabrus* 原名亜属に含んでよいものと思われる。交尾器(図3)の形態は、dorsal plateが発達するとともに、先端に dorsal process と呼ばれる突起片は認められない。この特徴も、本種が本亜属に含まれることを裏付けている。ただし、交尾器の構造は、dorsal plate が非常に大きく発達し、背面全体を覆っており、内側には長毛が密生して生えていることや、ventral process がこれ

に比してきわめて短くアンバランスであることなど、かなり特異な形態となっている。日本産の本亜属の他の種と比べてもかなり異っており、本亜属のなかで、特異な一群を形成するのではないかと考えられる。なお、一見すると北海道に多い *Rhagonycha* 属の種に似ており、相互に形態的な収斂現象が認められ、興味深い。

採集データ

1♂, 北海道大雪山白雲岳, 26. VII. 1965, T. KOTCHA 採集; 1♂1♀, 北海道大雪山, 12. VII. 1968, 滝沢春男採集; 1♂, 北海道日高町チロ

ロ岳頂上付近, 24. VII. 1993, 芳賀 馨採集。

分布

北海道(高山帯)、アムール、モンゴル、カムチャッカ、マガダン。

国内では北海道のみから採集されている。採集データからも分かるように、北海道でも比較的高い高山帯を中心に分布するようである。

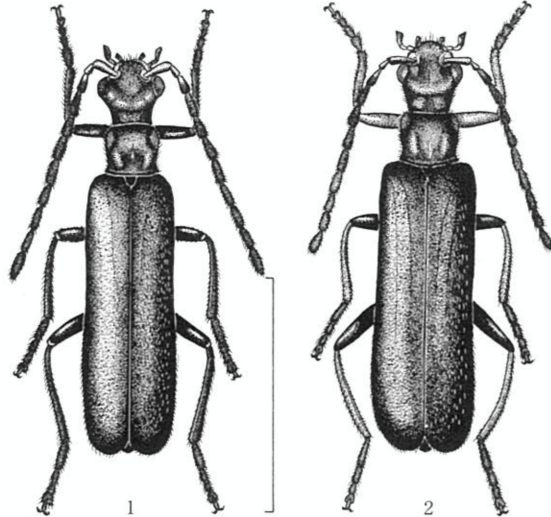


図1. *Podabrus (Podabrus) angusticollis* MOTSCHULSKY, 北海道大雪山産; 図2. *Podabrus (Podabrus) flavimanus* MOTSCHULSKY, 北海道足寄町産。スケール5mm.

* Kazuhiro TAKAHASHI, Two Canthalid-Beetles New to the Fauna of Japan.

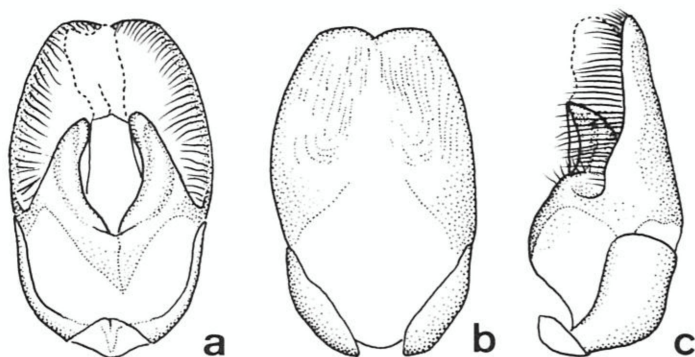


図3. *P. (P.) angusticollis* の雄交尾器。a: 腹面; b: 背面; c: 側面。

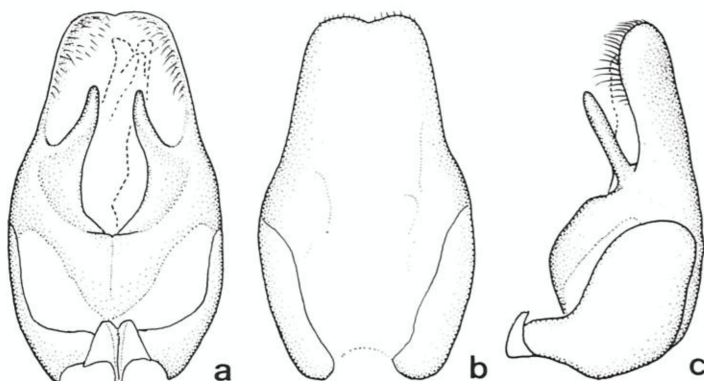


図4. *P. (P.) flavimanus* の雄交尾器。a: 腹面; b: 背面; c: 側面。

***Podabrus (Podabrus) flavimanus* MOTSCHULSKY, 1860**

エソクロクビボソジョウカイ (和名新称), 図2, 4. MOTSCHULSKY, 1860. *in* Schrenck, *Reisen Amurl*, 2: 116. 体長: ♂9.0 mm, ♀8.5-9.8 mm. 体幅: ♂2.2 mm, ♀2.1-2.4 mm.

全体に黒色で, 前頭側部と触角の第1, 2節の上半分は基褐色。前腿節と中, 後けい節はやや明るい色彩を呈する。色彩や形態は前種によく似るが, 全体にやや大きく, 幅も若干広めで, ガッチリとした種である。特に前胸背の形状はかなり横長で, 基部中央の縦隆起はほとんど認められない。爪の形状は, 雌雄ともすべて爪の基部が三角形にふくれる。交尾器(図4)の形態は, 前種とは明らかに異なっており, 交尾器を検すれば, 両者の区別は容易である。前種ほど特異ではないが, やはり dorsal plate が全体を覆うような構造をしており, ventral process がやや短い等の共通点が認められる。

採集データ

1♀, 北海道利尻島, 14-15. VII. 1963, 滝沢春男採集; 1♂, 北海道足寄町喜登牛山ホロカピリベツダム付近, 3. VI. 1989, 芳賀 馨採集; 2♀♀, 北海

道足寄町喜登牛山チセウエンベツ林道, 2. VII. 1989, 芳賀 馨採集; 2♀♀, 北海道上土幌町三股14の沢林道終点, 8. VII. 1989, 芳賀 馨採集; 1♀, 北海道上土幌町十勝三股5の沢, 29. VII. 1989, 芳賀 馨採集; 1♀, 北海道大樹町ホロカヤントウ沼湿地, 11. VII. 1993, 柴多浩一採集。

分布

北海道, 利尻島, アムール, ハバロフスク, マガダン。

前種と同様に国内では北海道のみから採集されている。採集データをみると標高のやや低い地域の記録が多く, 特に大樹町ホロカヤントウ沼湿地のようにほとんど海辺に近いような場所でも採集されている。このことから, 前種とは標高により棲み分けているものと思われる。また, 出現期が他のジョウカイ類と同様に早く, 一般の採集者が入る時期ではやや遅すぎるためか, あまり採集はされていないようである。しかし, 実際にはかなり広い分布域をもつ種と考えられ, 北海道内に広く分布するものと推定される。

る。

なお, 両種の同定については, 最近発行された極東アジアの甲虫類2 (MEDVEDEV 他, 1992) により行った。

日本産の *Podabrus* 亜属は, 現在までのところ本州以南に分布する。この亜属に属する種は, 日本から最初に記載されたクビボソジョウカイ *P. (P.) heydeni* KIESENWETTER を代表とするいずれもきわめて近縁な種群である。ところが, この報文で報告した北海道産の2種は, これらとはかなり異質なグループであり, 北海道のジョウカイボン相を考えると, 重要な存在になると考えられる。

参考文献

MEDVEDEV, L. N. & A. B. RYVKIN, 1992. Fam. Cantharidae. *In* LERA, P. A. (eds.). *Classification of Insects of Far East USSR*, 3(2): 29-40. Nauka, Sankt-Peterburg.

(神奈川県平塚市)

Nanseia erabuensis というコメツキムシ

大平 仁 夫

本種は KISHII (1966) が *Prodrasterius* 属の新種として口永良部島から記載した体長 5 mm 内外の黒色の種である。その後、KISHII (1985) は *Nanseia* 属を設立してこの種を所属させ、現在では屋久島と口永良部島、先嶋諸島の石垣島、西表島、波照間島、与那国島などに分布することが知られている。また、本属と本種の概要は大平 (1984) が示したとおりである。

大平 (1994) は、本種は CANDÈZE (1889) が Borneo 島の Sintang 地域から *Drasterius illinitus* として新種の記載をした種に極めて類似していることを報告した。この種は FLEUTIAUX (1928) では *Prodrasterius* 属の種として扱われ、Tonkin, Sumatra 地域にも分布することを記録している。

筆者は Miss VON HAYEK 氏の厚意で London の N. H. M. (Natural History Museum) に保管されている Sarawak 産で Dr. E. C. BECKER が同定した 1 雄個体を借用して調査することが出来た。HAYEK 氏によれば、現在 N. H. M. にはタイプ標本に相当するものは保管されていない、おそらく Burassels の王立博物館にあると思われると云うことであった。この度借用した標本は交尾器が取り出してあり、その形態についても詳しく調査することが出来た。

Sarawak 産の個体の形態は、琉球列島から KISHII (1966) が *P. erabuensis* として記載した種に極めてよく一致しているが、地理的な隔離によると思われる以下のような若干の変異が見られたので、ここに亜種として位置づけることにした。隣接の大

陸の個体は、FLEUTIAUX が同定した Tonkin 産の標本を調査した。これは琉球産に極めてよく一致した。従って、本亜種の分布は琉球から Thailand や Vietnam 地域に及ぶものと考えられる。本亜種は上記の Sarawak 産の個体に比して、前胸背板の両側はより平行状で、背面はより顕著に膨隆しており、表面の点刻はより小形でより密に印する。また、上翅の条線はより浅く印し、間室部はより扁平状である。命名上の処理は以下の Abstract の中で行った。

Abstract. Through the courtesy of Miss C. M. F. VON HAYEK of the Natural History Museum, London, the author has had the opportunity to examine the male specimen of *P. illinitus* (CANDÈZE, 1889) (Subfam. Conoderinae) from Sarawak determined by Dr. E. C. BECKER in 1977 as shown Fig. 1.

The following results are obtained from this study.

Nanseia illinitus erabuensis (KISHII, 1966) **status nov.**

Prodrasterius erabuensis KISHII, 1966, Bull. Heian High School, Kyoto: 8, pl. 2, f. 4 (Is. Kuchino-erabu-jima).

Ampedus iriomotocola KISHII, 1972, Bull. Heian High School, Kyoto: 7, pl. 1, pl. 2, f. 1 (Is. Iriomotejima).

Nanseia erabuensis: KISHII, 1985, Bull. Heian High School, Kyoto: 5 (established the genus *Nanseia*, designated *P. erabuensis* as the type of the genus).

This new status subspecies can be distinguished from the nominate subspecies from Borneo by the more parallel sides of pronotum, with the disk more clearly convex and more minutely and evenly punctate.

Distribution: Ryukyu Islands (Satsunans and Sakishima Isls), Vietnam and Thailand.

引用文献

KISHII, T., 1966. Some new forms of Elateridae in Japan (IV). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (10): 1-11, 2pls.
 — 1985. Some new forms of Elateridae in Japan (XVII). *Ibid.*, (29): 1-30, 1pl.
 大平仁夫, 1994. 日本産チビコメツキ亜科の属・種について. 越佐昆虫同好会特別報告, (2): 217-234.
 CANDÈZE, E., 1889. Elaterides Nouveaux, 4. *Annls. Soc. ent. Belg.*, 33: 67-123.
 FLEUTIAUX, E., 1928. Les Élatérides de l'Indochine Française (Catalogue raisonné). *Encycl. ent., Col.*, 3(4): 1-75. (愛知県岡崎市)



Fig. 1. *P. illinitus* の雄個体とそのラベル類 (in N. H. M)

長野県小谷温泉の歩行虫類

笠原 須磨生

1994年6月4~5日、長野県北安曇郡小谷村の小谷温泉で、日本鞘翅学会恒例の採集会がおこなわれた。当地は、深田久彌の「日本百名山」のひとつに挙げられた信越国境の峻峰 雨飾山の南麓にあり、オオハンミョウモドキやマヤサンコブヤズカミキリの多産地としても知られている。当日は快晴に恵まれ、広大なブナ林や湿地のそこここで明美な風光を愉しみながら探索に励む会員諸氏の姿がみられた。筆者も、ミズバショウの花や葉上に群がる色とりどりのスゲハムシや、路傍を這うマヤサンコブヤズカミキリなど種々な甲虫類を採集して楽しい二日間を過ごすことができた。それらの中から、歩行虫類を報告して、採集会の肝煎りをされた担当幹事の久保田正秀氏ならびに松本むしの会の平沢伴明氏のご尽力に報いたい。また、採集品を恵与くださった田添京二、露木繁雄両氏、同室でお世話になった長谷川 洋、記野直人両氏に厚く御礼申しあげる。

1. *Cicindela ovipennis* LEWIS マガタマハンミョウ 3頭。
2. *Nebria saevi* BATES オケサマルクビゴミムシ 2頭。
3. *Elaphrus japonicus* S. UENO オオハンミョウモドキ 32頭。広い湿地ばかりでなく、林間に点在する小湿地にもかならずみられた。
4. *Tachyura exarata* (BATES) ヒラタコミズギワゴミムシ 3頭。
5. *Bembidion paediscaum* BATES ヨツボシケンミズギワゴミムシ 2頭。
6. *B. alticulatum* (PANZER) マダラケシミズギワゴミムシ 1頭。前種と共に湿地で得た。
7. *B. echigonum* HABU et BABA エチゴアオミズギワゴミムシ 18頭。大海川、中海川の河原に多かった。
8. *B. scopulinum* (KIRBY) キモンナガミズギワゴミムシ 1頭。露木繁雄採集。
9. *B. trajectum* NETOLITZKY キアシルリミズギワゴミムシ 2頭。
10. *B. cnemidotum* BATES ウスモンミズギワゴミムシ 1頭。
11. *B. misellum* HAROLD ニッコウミズギワゴミムシ 6頭; 1頭。露木繁雄採集。
12. *B. sanatum* BATES ミヤマミズギワゴミムシ 2頭。
13. *B. pseudolucillum* NETOLITZKY ヒラタアオミズギワゴミムシ 1頭。
14. *B. oxyglymma* BATES クロミズギワゴミムシ 2頭。
15. *B. lucillum* BATES ハコネミズギワゴミムシ 12頭。
16. *B. tetraporum* BATES ヨツアナミズギワゴミムシ 2頭。
17. *B. nuncaestimatum* NETOLITZKY オオヨツアナミズギワゴミムシ 1頭。
18. *Diplous depressus* (GEBLER) ヒメカワチゴミムシ 10頭。河原に多かった。
19. *Stomis prognathus* BATES キバナガゴミムシ 5頭。
20. *Pterostichus sulcitaris* MORAWITZ アシミノナガゴミムシ 2頭。
21. *P. subovatus* (MOTSCHULSKY) マルガタナガゴミムシ 1頭。
22. *P. yoritomus* BATES ヨリトモナガゴミムシ 2頭。
23. *P. ambiguus* BATES クロホソナガゴミムシ 12頭。湿地に多かった。
24. *P. microcephalus* (MOTSCHULSKY) コガシラナガゴミムシ 1頭。
25. *P. polygenus* BATES ニッコウヒメナガゴミムシ 2頭。
26. *P. macrogenys* BATES ニッコウオオズナガゴミムシ 2頭。路傍の礫質の崖から掘り出した。赤味の強い個体である。
27. *P. abaciiformis* STRANEO ムナビロナガゴミムシ 2頭。
28. *P. uenoi* STRANEO ウエノオオナガゴミムシ 3頭。浅海川の溪畔の石下より採集した。
29. *P. spiculifer* BATES ハラトゲナガゴミムシ 2頭。4亜種が知られている。小谷産は、雄腹板末端節の突起の形態がやや異なるが、基亜種に近い。
30. *P. latistylis* TANAKA タナカナガゴミムシ 1頭。分布が広く、地域変異に富む。小谷産1♂の腹板末端節後縁の張り出しは、やや台形。交尾器右側片は、幅広い相称形で先端はとがる。
31. *P. asymmetricus* BATES ベーツナガゴミムシ 15頭。小溪畔の大きな石の下に数頭ずつ集まっていることが多かった。本種も地域変異が多く、また、小谷の個体群中にも変異が認められる。雄腹板末端節の突起が幅狭いものが多く、陰茎の先端は、ほとんどが広がらない。
32. *Platynus subovatus* (PUTZEYS) ヤマトクロヒラタゴミムシ 5頭; 1頭。露木繁雄採集。石下や倒木の下に見られた。
33. *P. charillus* (BATES) オンタケヒメヒラタゴミムシ 20頭。湿地に多い。
34. *P. impressus* (PANZER) セボシヒラタゴミムシ 2頭。
35. *Colpodes buchanani* HOPE オオアオモリヒラタゴミムシ 1頭。
36. *C. amoenulus* JEDLIČKA ニセオオアオモリヒ

- ラタゴミムシ 1頭, 田添京二採集, 栃木県日光原産で少ない, 当日, 上野俊一博士も採集された由.
37. *C. hakonus takachihoi* (HABU) ハコネモリヒラタゴミムシ 2頭.
38. *C. bentonis* BATES ベントンモリヒラタゴミムシ 6頭.
39. *C. japonicus* (MOTSCHULSKY) ハラアカモリヒラタゴミムシ 5頭; 2頭, 露木繁雄採集. 初夏の頃は湿地に多い.
40. *C. speculator* HAROLD ホソモリヒラタゴミムシ 1頭; 1頭, 露木繁雄採集.
41. *C. elainus* BATES ヤセモリヒラタゴミムシ 4頭.
42. *C. modestior* BATES イクビモリヒラタゴミムシ 1頭.
43. *Pristosia aeneola* (BATES) ホソヒラタゴミムシ 2頭.
44. *Amara congrua* MORAWITZ ニセマルガタゴ

- ミムシ 3頭.
45. *Anisodactylus tricuspidatus* MORAWITZ ヒメゴミムシ 1頭.
46. *Trichotichnus* sp. (aff. *T. leptopus* (BATES)) 1頭. ♀で確定できない.
47. *Stenolophus iridicolor* REDTENBACHER ツヤマゴモクムシ 1頭.
48. *Chlaenius pallipes* GEBLER アオゴミムシ 1頭.
49. *C. naeviger* MORAWITZ アトボシアオゴミムシ 2頭.
50. *Lebia fusca* MORAWITZ エゾハネビロアトキリゴミムシ 3頭, 露木繁雄採集.
51. *L. idae* BATES アトグロジュウジアトキリゴミムシ 1頭, 露木繁雄採集.
52. *L. sylvarum* BATES ミヤマジュウジアトキリゴミムシ 1頭.
53. *Brachinus stenoderus* BATES コホソクビゴミムシ 3頭. (千葉県船橋市)

○瀬戸内地方におけるシロヘリハンミョウの記録

シロヘリハンミョウ *Cicindela* (*Callytron*) *yuasai* NAKANE は外洋に面した海岸に生息することが知られているが, 筆者は本種を瀬戸内海沿岸で採集しているので報告しておく.

1♀, 岡山県倉敷市大島, 12. VI. 1992, 筆者採集(写真).

採集した場所は岩礁と粒の粗い砂浜が混ざる海岸である. 砂上に飛来着地したものを採集した.

HORI & CASSOLA (1989) が示した分布図には当てはまらない記録であるが, (1) 採集した場所が岩礁地帯である, (2) 上唇の3歯の中央の1個が他より張り出す, (3) 上翅側縁の白帯は細く後角付近では認めにくくなっている, (4) 鏡紋は明瞭で光沢があるなどシロヘリハンミョウの特徴を備えているため, 本種と同定した.



なお, 上記の標本は倉敷市立自然史博物館に収められている.

末筆ではあるが, 今回の発表に関していろいろとご指導くださった名古屋女子大学の佐藤正孝博士に厚くお礼申し上げる.

参考文献

堀 道雄, 1988. 海浜性ハンミョウ類のすみわけと共存. 日本の甲虫, pp. 14-22. 東海大学出版会, 東京.

HORI, M. & F. CASSOLA, 1989. Notes on the tiger beetle complex of *Callytron nivinctum* (Coleoptera, Cicindelidae) with description of a new subspecies. *Jpn. J. Ent.*, 57: 504-516.

九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター編, 1989. 日本産昆虫総目録, 1767 pp. 九州大学農学部昆虫学教室, 福岡.

佐藤正孝, 1985. ハンミョウ科. 原色日本甲虫図鑑 (II), pp. 5-14, pls. 1-2. 保育社, 大阪.

(倉敷市立自然史博物館, 奥島雄一)

○オオマルガタゴミムシを北見市で採集

オオマルガタゴミムシ *Amara gigantea* (MOTSCHULSKY) の北海道での記録は少なく, 保田信紀, 松本英明両氏のまとめられた「北海道の歩行虫類」(保田・松本, 1993) には旭川市の記録のみが収められているが, 松本氏からの私信では道南の記録もあるように聞いている. 今回筆者は, 北見市で採集された本種を検する事が出来たので, 記録しておく.

1♀, 北見市中之島公園, 9. VIII. 1993, 柳谷卓彦採集. ブラックライトと水銀灯の併用で, 他にはオオゴモクムシ 1♀が得られた. 標本は北見市の北網圏北見文化センターに保管されている. この標本の他にも, オホーツク海に面した紋別市で採集された標本を見ているので, 道内には少数ながら広く分布しているようである. 末筆ながら記録の公表を快諾された北網圏北見文化センターの柳谷学芸員に感謝する.

(北海道北見市, 加藤敏行)

○イリエヒメマルタマムシの新産地および寄主植物の記録

イリエヒメタマムシ *Philanthaxia iriei* Y. KUROSAWA, 1985 は, これまで与那国および竹富島で記



リウキュウコクタン材中の蛹。

録されているが、筆者は1993年7月に、石垣島川平にて数度にわたり、多数の個体をリウキュウコクタンの葉上より採集したので、新産地として報告する。

なお、1994年6月6日、同地近くのリウキュウコクタン枯枝材中より、本種の蛹2頭と成虫2頭を確認したので、寄主植物の1種として記録しておく。

末筆ながら、本種の同定およびご教示を頂いた黒沢良彦博士に厚くお礼を申しあげる。

(沖縄県石垣市、深石隆司)

○シロウズベニコメツキを札幌市で採集

シロウズベニコメツキ *Denticollis varians shirouzui* ÔHIRA は大雪山で採集された1♂に基づいて記載された種であり、その後の採集例も少ないようである。大雪山一帯で永年、甲虫類の調査をされている保田信紀氏も大雪山、石狩川源流地域の甲虫類の総目録をまとめられた際に、原記載を引用しているだけである(保田, 1985~1993)。筆者の一人、宮下はオサムシトラップによる9頭(宮下, 1993)と、土場で採集した1頭(宮下, 印刷中)を報告しているが、いずれも大雪山国立公園内であり、他には鈴木(1980)による日高山脈の高山帯が分布地として知られているだけである。

筆者の一人、杉本は札幌市で地表性甲虫の調査中に本種を採集しているので新分布として報告しておく。

1♂, 札幌市砥石山, 18~28. VII. 1994, 杉本採集, 宮下同定。

なお、本種の学名は以前は *D. shirouzui* となっていたが、ÔHIRA (1993) では上記のような学名になっているので、ここでもこれに従っておくことにする。

引用文献

宮下公範, 1993. シロウズベニコメツキの採集例. *Antenna*, (1): 50.

—— (印刷中). 北海道で採集した若干の甲虫類について. *Antenna*, (2): 16-18.

ÔHIRA, H., 1993. New or little-known Elatelidae (Coleoptera) from Japan, XIII. *Elytra*, Tokyo, 21: 249-254.

鈴木 互, 1980. 北海道日高におけるシロウズベニコメツキの記録. 甲虫ニュース, (52): 6.

保田信紀, 1984-1993. 糖蜜トラップによる大雪山の甲虫類相調査I~XI. 上川町の自然.

(北海道江別市, 宮下公範; 札幌市, 杉本 肇)

○山梨県身延町におけるエトロフイネゾウモドキの記録

筆者は、山梨県身延町において、河川敷のヤナギ類の花のスイーピングにより、エトロフイネゾウモドキ *Dorytomus etorofuensis* Kôno を採集しているので記録しておく。

8頭, 山梨県身延町早川河川敷, 27. III. 1994, 雑倉正人採集。

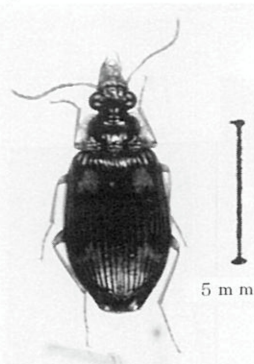
当地は富士川の一支流である早川の合流点付近で標高約300m. 背後に南アルプスの高峰群を有するが、山梨県内では最も温暖な照葉樹林帯に属している。

本種は堀川正美氏のご教示によれば、長野県野辺山で得られた例があるが、身延町の産地は分布の南限に近いと思われる。新芽が出る前の早春に観察されたことは興味深く、4月23日に再び当地を訪れ、花が終わって葉が伸びはじめたヤナギにスイーピングを試みたが、本種は得られなかった。変わってホッカイジョウカイ *Wittmercantharis vulcana* (LEWIS) が多数発生していた。

本種を同定され、有益な助言を頂いた堀川正美氏にお礼申し上げる。標本は3頭を堀川氏が、他は筆者が保管している。(山梨県韭崎市, 雑倉正人)

○ヒメキノコゴミムシの大阪府茨木市における採集例

ヒメキノコゴミムシ *Coptodera osakana* (NAKANE, OHKURA et S. UENO) は比較的稀種とされるが、筆者は下記のごとく本種を、模式産地である大阪府止々呂美村[現、箕面市止々呂美地区]の近傍の茨木市にて得ている。これに付随するものとして記録しておきたい。



1頭, 大阪府茨木市大岩, 26. VI. 1983, 岩田隆太郎採集(写真)。

発表を勧められた横浜市鶴見区の田尾美野留氏に御礼申し上げます。

(日本大学農獣医学部林学科, 岩田隆太郎)

茨城県つくば市におけるムネアカセンチコガネの発生時期について

芳 賀 馨

ムネアカセンチコガネ *Bolbocerosoma nigroplagiatum* (WATERHOUSE) は、よく知られた大型の食糞性コガネムシで、1970年ころまでは各地で比較的普通に見られたようである。しかし近年の平地～低山地の環境悪化に伴って減少し、茨城県下でも1980年以降は1例の記録を見る程度である(渡辺, 1994)。ところが1990～'94年の5年間に、同県南部の筑波学園都市の中心部に位置する筆者の実家の燈火に異常な高頻度で本種が飛来し、その一部を採集するとともに発生日を記録することができた。本種がまとまって採集されることは近年では珍しいと思うので記録しておきたい。

調査地点は茨城県つくば市竹園3丁目の住宅地で、標高約23mの洪積台地上にある。芝生やアジサイ、キョウチクトウ等の植込の中に約15m間隔で集合住宅(2階建, 4軒1棟)が格子状に並んでいて、周辺の植生はアカマツ二次林、水田、ススキ草原等で極めて貧弱である。各住宅棟の中央部にある共用階段に終夜蛍光燈が点灯されており、その下に前夜飛来した昆虫が落下している。今回報告する個体は全てそれらの中から見出したもので、原則として筆者の実家がある棟で採集したが、一部は隣接する他の棟で採集した。

筆者の家族は1975年10月に調査地点の住宅に入居したが、1989年までの15年間に本種は1頭飛来したにすぎず、調査地点の隣接地域を含めても合計3頭が採集されたにすぎない。

1♀, つくば市天王台(筑波大学構内), 12.VII.1978, 芳賀 純採集; 1♂, つくば市筑波山頂上付近, 6.VIII.1983, 芳賀 純採集; 1♂, つくば市竹園3丁目, 27.VIII.1985, 芳賀 純採集。

ところが、1990年秋に一度に3頭が得られ、それ以降毎年採集されるようになった。以下の採集地点は全て竹園3丁目である。採集者は芳賀純, 芳賀美智子の両名で、それぞれ「J」「M」と略記する。

1♀, 26-30.IX.1990, J; 2♀♀, 7.X.1990, J; 1♂, 19.IX.1991, J; 1♂1♀, 13.VI.1992, J; 2♂♂2♀♀,

14.VI.1992, J & M; 1頭, 3.X.1992, M(観察のみ); 1頭, 31.X.1992, J(観察のみ, 大型個体); 1♀(死体), 22.VII.1993, J; 1♀(死体), 22.VIII.1993, J; 1♂(死体), 9.X.1993, J; 1頭, 10.XI.1993, J(観察のみ, 活発に動いていた); 1♂(死体), 26.VI.1994, M; 3♂♂(生)2♀♀(死体), 4.VII.1994, J; 1♀(死体), 21.VII.1994, J; 1♂, 18.IX.1994, J(観察のみ); 1♀, 2.X.1994, J; 1♀, 5.X.1994, J; 1♂, 6.X.1994, J(観察のみ); 1♂, 8.X.1994, J(同); 1♂, 15.X.1994, J(同); 1♀, 16.X.1994, J(同); 1♂, 17.X.1994, J(同); 1♂2♀♀, 20.X.1994, J(同); 1♂1♀, 22.X.1994, J(同); 1♀(死体), 27.X.1994, M; 1♀, 6.XI.1994, J(観察のみ, 歩行中)。

本種が飛来するのは、昆虫全般に飛来数の多い高温多湿の夜で、筆者の実家がある棟以外の棟にも同程度の頻度で飛来しているらしかった。たとえば1992年6月14日には、隣接する他の3棟の階段燈下でも各1頭が得られ、1日で4頭が採集されている。

1992年6月に採集された6頭のうち1頭をガラスびんに捉え、チーズを与えたが摂食せず、約1週間で死亡した。

1994年7月4日に採集された雄3頭を、畑土を入れたガラスびんに入れて放置したところ、すぐに土に潜って見えなくなったが、7月10日に掘り出したところ、3頭とも元気に動いていた。7月27日に再度掘り出したところ、2頭が死亡し1頭はなお元気に動いていた。

採集した個体は全て、前胸背に黒紋を表さないいわゆる東日本型の個体であった。ただし1994年10月27日採集の1♀だけは、前胸背基縁中央とその両わきに計3個の小黒点を有していた。

本種の生態に関してはある程度和田(1984)によって解明されており、成虫の出現時期に6月上旬～7月上旬と8月下旬～9月上旬の二つのピークがあることが報告されている。一方、つくば市での観察個体数を時期別に整理すると表-1のようになり、鮮明ではないが6月中旬～7月上旬と9月中旬～10月中旬の二つのピークが認められる。

和田は、成虫の寿命と出現時期のピークの間隔を比較し、本種が6月上旬から9月上旬にかけて長期間にわたり発生し続けると推測している。しかしつくば市での成虫の出現時期のピー

表-1. つくば市におけるムネアカセンチコガネの観察個体数。

時期 年	6月		7月		8月		9月		10月			11月
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上
1990年								1	2			
1991年							1					
1992年	6								1		1	
1993年				1			1		1			1
1994年		1	5		1			1		4	6	3

クの間隔は、和田の報告より約1ヶ月長い3ヶ月で、成虫の寿命(約3週間)との乖離が大きい。このことから筆者は、本種は秋に羽化して成虫越冬して翌年初夏に産卵し、盛夏には旧成虫が死滅して幼虫が生育するという周年経過を辿るのではないかと考えている。しかしその証明のためには、和田が「観察を充分行えなかった」卵以降の発生段階の解明が必要であることは言うまでもない。

本種の食餌は和田(1984)によれば、古い乾燥した牛糞である。調査地点の周辺には、現在でも牛を飼っている農家があるが、その数は1970年代に比べはるかに減少している。つくば市の都市化の進行に伴い、以前は多産した昆虫のほとんどが著しく減少するか全く見られなくなっているのに、過去に稀だった本種だけが最近になって高頻度で見られるの

は極めて不自然なことである。何らかの発生源が近くに新しくできたと思えないが、確認できていない。

本種は、筆者が調査地点に常住または帰省している際には一度として飛来しなかった。全ての採集・観察は父・芳賀純と母・芳賀美智子によるものである。明記して厚くお礼申し上げる。

参考文献

- 水戸昆虫研究会, 1993. 茨城県の昆虫. 水戸市立博物館.
和田 薫, 1984. ムネアカセンテコガネの生態について.
昆虫学評論, 39: 95-100.
渡辺正光, 1994. 茨城県のムネアカセンテコガネの記録.
月刊むし, (274): 9-10.

(新潟県南魚沼郡)

○オオシママドボタルを西表島で採集

オオシママドボタルは、奄美大島から記載された種であるが、最近奄美大島からは記録がない。現在確実な分布は、石垣島だけである(佐藤, 1985)。

著者は、本種を西表島より採集しているので、記録しておきたい。本種を同定して頂いた中根猛彦博士に厚くお礼申し上げる。



Lychnuris atripennis (LEWIS) オオシママドボタル
1頭(体長17mm), 西表島大原, 5. I. 1994, 松井英司採集; 1頭(体長14mm), 西表島古見, 5. I. 1994, 松井英司採集。

引用文献

佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑(III):121-124.

(荒尾高等学校, 松井英司)

○ウエノコミズギワゴミムシを愛知県で採集

ウエノコミズギワゴミムシ *Paratachys uenoi-anus* (HABU) は、台湾産標本で記載された比較的小型で細長い体型をしたゴミムシで、記載以後最近まで日本での採集記録はなかったが、ごく最近 KASAHARA(1994) によって日本各地(東京都八王子市, 東京都大田区, 高知市, 沖縄県与那国島)から報告された。

筆者も本種を愛知県で採集しているので、この機会に新産地として記録しておきたい。

1頭, 愛知県瀬戸市定光寺, 4. VIII. 1984, 穂積採

集(灯火), 森田誠司保管。

同定をお願いした森田誠司氏によると、本種は温暖な地域に広く分布していて、氏自身も神奈川県丹沢の沢のコケの下から採集されているという。

末筆ながら、同定および発表を勧められた森田誠司氏にお礼を申し上げます。

参考文献

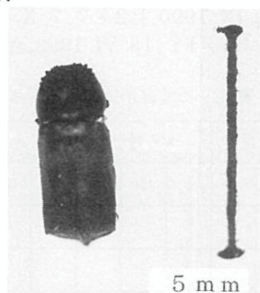
- HABU, A., 1974. Notes and description of Formosan Carabidae taken by Dr. S.-I. UENO in 1961 (Coleoptera, Carabidae). IV A new species of *Tachys*. *Trans. Shikoku ent. Soc., Matsuyama*, 12: 47-48.
KASAHARA, S., 1994. Occurrence of *Paratachys uenoi-anus* (Coleoptera, Carabidae) in Japan. *Elytra, Tokyo*, 22: 80.
(愛知県小牧市, 穂積俊文)

○クロヒメナガシクイの与那国島からの記録

クロヒメナガシクイ *Xylopsocus bicuspis* LESNE は四国から台湾に広く分布する種であるが、従来与那国島からの記録はなかった。

筆者は東京都稲城市(現、大阪府堺市)の吉田篤人氏より、同島産の本種標本を恵与されている。氏に深謝するとともに、ここに記録しておきたい。

1頭, 与那国島ティンダ鼻, 2. V. 1989, 吉田篤人採集(写真)。



(日本大学農獣医学部林学科, 岩田隆太郎)

○長野県のシマチビゲンゴロウの記録

シマチビゲンゴロウ *Nebrioporus simplicipes* (SHARP) は、従来、北海道および青森、宮城でのみ記

録されていたが、筆者らは、1994年6月5日、小谷温泉で開かれた採集例会に参加した祈り、本種を採集しているので報告する。

14頭、長野県小谷村小谷温泉、記野・長谷川採集。

採集地は、小谷温泉よりやや下流の川原の水たまりで、ヒメシマチビゲンゴロウ *N. nipponicus* TAKIZAWA とともに得られた。

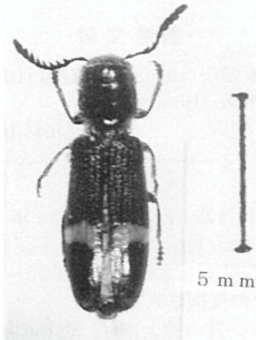
なお、末筆ながら、いろいろご教示いただいた北山 昭氏にお礼申し上げる。

(東京都杉並区、記野直人；同三鷹市、長谷川 洋)
○ムニンヒメカッコウの小笠原諸島兄島からの記録

筆者の一人川下は、小笠原諸島特産のムニンヒメカッコウ *Tilloidea munin* NAKANE を兄島産のシマイスノキの材から羽化脱出させている。兄島からは未記録と考えられることから、ここに記録しておきたい。

1頭、小笠原兄島中央部、21. XI. 1991 (シマイスノキ枯幹)、1~10. VII. 1992 羽化脱出、川下 貴採集 (写真)。

この材はオガサワラヒラタカミキリ *Eurypoda*



boninensis HAYASHI et KUSAMA, およびゾウムシ科クチカクシゾウムシ亜科の1種の食入を受けていたもので、同属のネアカヒメカッコウ *T. notata* (KLUG) が穿孔性の小型甲虫類の捕食者であること (IWATA, 1989) を考慮すると、本記録個体は、ゾウムシの方を捕食していたものと推察される。

引用文献

IWATA, R., 1989. *Pan-Pacif. Entom.*, 65: 449-450.
(日本大学農獣医学部林学科、岩田隆太郎；那覇植物防疫事務所、川下 貴)

○東京都八王子市でフトクチヒゲヒラタゴミムシを採集

フトクチヒゲヒラタゴミムシ *Parabrosicus crassipalpis* (BATES) は一見ナガゴミムシのような体形をし、下唇ひげ末端節が異常に膨隆した特異なヒラタゴミムシで、個体数も少ないようである。

本種を下記の場所より採集したので報告する。

1頭、東京都八王子市高尾山、2. VII. 1994、和泉敦夫採集；1頭、同所、3. VII. 1994、津崎 満採集。

林道の脇に溜った落葉の下より採集した。

末筆ながら発表を許された津崎 満氏にお礼申し上げます。
(東京都大田区、和泉敦夫)

○横浜市緑区のおオキベリアオゴミムシの記録
(田園都市線甲虫シリーズ その7)

横浜市緑区に存在していた旧赤田地区 (最近あざみ野南という結構な名前が付いた) および大場町北部の雑木林はバブル時代の開発の犠牲となって、今は全くその面影もない。その残された最後の雑木林の一角で、緑区では採集例の少ないおオキベリアオゴミムシ *Epomis nigricans* を採集しているので報告する。

1♂、横浜市緑区大場町、3. I. 1993、大木 裕採集。

現地は航空管制塔のある標高80mの丘の頂上付近であり、南向きの小さな赤土の崖を崩して、越冬中の個体を掘り出した。この付近は往年の名採集地で、アカマダラコガネ、ホソトラカミキリ、ホソキリンゴカミキリ、トラフコメツキなどを得たこともあったが、今は宅地造成中であり、今後、本種を採集できる可能性は殆ど残されていない。

(神奈川県横浜市、大木 裕)

○クロホシクチキムシの東京都の採集例

クロホシクチキムシ *Pseudocistela haagi* HAROLD は、クチキムシ科の中では採集例が少ないようで、各地で発行されている調査報告書の中でもあまり見かけることのない甲虫である。

筆者は本種を東京都で採集することができたので記録しておきたい。

1♂、東京都町田市小野路、11. VI. 1994。

採集地は丘陵地のクリ林に隣接する雑木林で、広葉樹の茂みをビーティングしていたところネットの上に落ちてきたものである。

筆者も今回初めて本種を採集したが、採集場所は上記の通り特に変更している環境ということでもなく、どうして採集例が少ないのかよく分からない。なお、筆者の知る限りの東京都における本種の記録は、1963年に板橋区から採集された1例を知るのみである。
(東京都世田谷区、沢田和宏)

○中国地方におけるフクシマモリヒラタゴミムシの記録

フクシマモリヒラタゴミムシ *Colpodes mutator* BATES は、中部・近畿地方の山地に分布し、中国地方からは知られていなかった。筆者らは、岡山・鳥取両県で採集された本種を見ることができたので報告する。産地は、いずれも中国地方の東縁部にあたるが、少なくとも、これまで知られていた本種の記録地としては最西端になる。貴重な標本を恵んでくださった渡辺昭彦氏に心から御礼申し上げます。

2♂♂、岡山県西粟倉郡若杉峠、18-19. VI. 1989、渡辺昭彦採集。

1♂、鳥取県智頭町八河谷、4. VII. 1993、山地 治採集。

(千葉県船橋市、笠原須磨生；岡山市、山地 治)

○イワハママシを本州で発見

イワハママシ *Aegialites stejneri* LINELL はサハリン、千島から北海道にかけて分布する海浜昆虫で、北海道では留萌から瀬棚にかけての海岸及び知床半島でしか採集されていないようである。

筆者は北海道に面した下北半島北部海岸で採集したので報告する。

1頭、青森県下北郡風間浦村蛇浦, 10. V. 1994. また本種とよく一緒に見られるクロブセスジダマガムシ *Neochthebius granulatus* (M. SATO) も1頭、一緒に採集しているので併せて報告したい。

筆者の北海道での採集では、海岸の岩礁に生息し、岩は黒っぽい溶岩でしか見られず、満潮時には陸地との間が海中に没する岩に限定されるようである。春は個体数も多く、本種のものらしき幼虫も見られたが、盛夏の頃には少ないようで、採集していない。

筆者は今回、下北半島北部の数ヶ所で採集を試みたが、結局採集できたのは上記の採集地でわずかに1頭のみであり、北海道各地の個体との差異も詳しく比較していない。

最後に、発表を勧め、いろいろとご教示いただいた、旭川市の松本英明氏に厚くお礼申し上げます。

参考文献

大原昌宏・工藤慎一・神田正五, 1989. 狩場茂津多道立自然公園調査, 昆虫類, pp. 150-161.

(青森県むつ市, 荒木 哲)

○オキナワジャンノメカミキリ伊平屋島に産す

伊平屋島でオキナワジャンノメカミキリ *Microleucampytus nakabayashii* TAKAKUWA, 1992 を採集しているので報告する。

1♀, 沖縄県島尻郡伊平屋村腰岳, 26. VI. 1993, 田中 稔採集。

腰岳林道に最近新設された展望台で、発電機を用いての夜間採集で得た。誤って踏み潰してしまい、小破した標本になってしまった。



伊平屋島産オキナワジャンノメカミキリ♀

参考文献

大林延夫, 1992. 日本産カミキリムシ検索図説。

(兵庫県西宮市, 田中 稔)

○カワチマルクビゴミムシを十勝支庁で採集

カワチマルクビゴミムシ *Nebria lewisi* BATES の北海道における記録は保田・松本(1993)によると北海道南部、道央部の渡島支庁、石狩支庁、空知支庁管内からわずかに記録されているに過ぎない。今回筆者は、道東の十勝支庁管内新得町(十勝川)において本種を採集することが出来たので記録する。採集地は新得町を流れる十勝川の河原で、やや大きめの石をよけた際に、多数のオオマルクビゴミムシに混ざって得られた。

1♂, 河西郡新得町, 17. IX. 1994, 加藤敏行採集, 保管。

本記録が本種の東限記録になると思うが、日高支庁の三石町においても本種が採集されているので、併せて記録しておく。

4頭, 三石郡三石町ケリマイ(ケリマイ川河口), 宮下公範採集; 3頭, 三石町ケリマイ(同河口よりやや上流の開けた河原の石下), 22. VII. 1993, 堀繁久採集。

末筆ながら日高支庁における記録の公表を快諾し、データをお寄せ頂いた宮下、堀両氏に感謝します。

参考文献

保田信紀・松本英明, 1993. 北海道の歩行虫類. 層雲峡博物館研究報告, (13): 1-93.

(北海道北見市, 加藤敏行)

◇会告◇

日本鞘翅学会第7回大会(1994年11月19日)に際して開かれた総会において、下記の会則改訂案(1.)、会費額改訂案(2.)、および1995~1996年度役員改選案(3.)が採択されました。

一般会員年会費の値上げは、近年の郵便料金の高騰による学会財政の圧迫によるところが大きく、ご理解を賜りたく存じます。一般会員の方の新年度年会費納入の際にはご注意ください。

1. 会則改訂

①第25条第1項:

旧会則: 「会員は次にあげる会費を納入しなければならない。ただし、名誉会費からは会費の徴収は行なわない。

イ. 一般会員……

ロ. 賛助会員……」

新会則: 「会員は総会で可決された所定額の会費(会記)を納入しなければならない。ただし、名誉会員からは会費の徴収は行なわない。」

(イ. とロ. の亜項を削除)

②第25条第2項

旧会則: 「本会の経費は会費その他でまかなうものとする。」

新会則: (削除)

③旧会則: 「第25条第3項」

新会則: 「第25条第2項」

④第27条:

旧会則:「この会則は1989年3月26日より施行する。」

新会則:(削除)

⑤新会則:末尾(右寄せで以下追加):

(1989年3月26日制定)
(1995年1月1日一部改訂)

2. 会費額改訂

一般会員年会費: ¥6,000.

新人会費, 国外会員年会費, 賛助会員年会費は据置き.

3. 1995~1996年度新役員

会長: 佐藤正孝

副会長: 露木繁雄

常任幹事(13名): 渡辺泰明(総務・庶務); 岩田隆太郎(同); 常喜 豊(同); 久保田正秀(同); 斉藤秀生(同); 斉藤明子(会計); 上野俊一(編集委員長); 新里達也(Elytra編集); 妹尾俊男(甲虫ニュース編集); 石田勝義(渉外); 大木 裕(大会); 日下部良康(例会); 江本健一(木曜談話会)

幹事(14名): 安藤清志; 荒谷邦雄; 藤田 宏; 林靖彦; 平野幸彦; 穂積俊文(名古屋支部長); 笠原須磨生; 森本 桂; 中村俊彦; 西川協一; 大原昌宏; 大林延夫; 遠山雅夫; 山上 明

会計監査(2名): 田添京二; 渡 弘

編集委員(6名, 内4名兼任): 上野俊一(委員長); 森本 桂; 新里達也; 岡島秀治; 妹尾俊男; 高桑正敏

(庶務担当, 岩田隆太郎)

◇大会報告◇

日本鞘翅学会第7回大会は, 11月9日(土), 国立科学博物館新宿分館において開催された.

最初に総会が開かれ, 各担当幹事の会務報告の後, 会則の改正と会費の改訂が承認された. これに伴ない, 95年度より一般会員の年会費は6千円となる. 続いて次年度にむけての役員交替が議事となり, 佐藤正孝新会長を中心とする新体制が承認された.

総会に引き続き, 特別講演が2題行なわれた. 最初は, 横須賀市立博物館の大場信義氏による, 琉球列島のホタルについての講演であった. 日本産のホタルを発光様式や発光行動パターンでグループに分けると, その発光行動パターンの相異は, 種としての隔たりと良い相関があることが紹介されたほか, カメラを用いた発光時間と波形の定量的データ, 明け方の5時10分頃突然に出現するクメジマボタルの♀の生態やすべての体節が発光するイリオモテボタルの♀の写真など, 興味深い事例が豊富なスライドで紹介された.

つづく特別講演は山梨大学の池田清彦氏によるオーストラリアの甲虫の紹介であった. 講演の内容は, オーストラリアの採集地, 採集方法, 採集の心構え, 現地の法律と研究者などの氏が体験で習得された有益な情報の紹介であり, 人を引きつけてはな

さない氏の話術に耳を傾けているうちに講演の時間が流れていった.

一般講演は, 江崎功二郎氏と岩田隆太郎・坂野勉氏による2題で, いずれも統計的データや観察による新しい知見に関する発表であった.

この後, 恒例の同定会が行なわれ, 大会は成功裡に閉会となった. 懇親会は, 高田馬場のインドシナレストラン「カンボジア」で開かれ, 定員40名の会場に, どういうわけか55名が入り, それでいて各自それなりに楽しく親睦をかわして時を過ごしたよう, まさしく虫屋ならではの世界であった.

(大会担当, 大木 裕)

一般講演要旨

(1) クワカミキリによるケヤキ植栽造林地の被害と生態

江崎功二郎(石川県林業試験場)

クワカミキリ *Apriona japonica* THOMSON のケヤキ *Zelkova serrata* MAKINO の加害例は, 若干が知られているに過ぎないが, 近年になって本種によるケヤキの植栽幼齢木からの被害が発生している. 石川県珠洲市のケヤキ植栽造林地においても, クワカミキリによる被害の発生が確認された. 被害地の被害本数率は約3%であった. 健全木の幹直径の平均値は47.4 mm, 被害木は67.9 mm で有意な差が認められた. 食坑道の多くは縦方向に一直線に続いており, 下に進むに従って広がっていた. 根部まで食坑道が続いていた被害木は, 被害木全体の約36%を占め, 幹部や根部で往復している食坑道も多数見られた. 食坑道の長さの最大値は2.93 mであった. 食坑道の始点の部分を産卵部位としての被害木の地上高1 m 幹直径と産卵部位の地上高の関係は, 正の相関関係が示され, 産卵部位の幹直径は40-50 mm にピークが見られた.

(2) 神奈川県産ヤマトシロアリコロニー内の甲虫相(1)

岩田隆太郎・坂野 勉(日大・農獣医)

神奈川県下の藤沢市石川, 津久井郡城山町川尻, 横浜市南区六ツ川の3ヶ所において, ヤマトシロアリのコロニー内に棲息する甲虫を調査し, 得られた全甲虫種につき, そのコロニー内の発見場所, ヤマトシロアリとの接触や相互行動を通して, シロアリとの生態的関連性について検討を加えた.

今回得られた甲虫は *Ptinella* sp. (ムクゲキノコムシ科), *Aleocharinae* sp., シロアリハネカクシ(以上ハネカクシ科), アナムネカクホソカタムシ(カクホソカタムシ科), マツオオキクイゾウムシ(ゾウムシ科), キクイサビゾウムシ(オサゾウムシ科)の5科6種で, この内のハネカクシ科の甲虫2種はヤマトシロアリと密接な共生関係があるといえ, 一方キクイサビゾウムシ, マツオオキクイゾウムシの2種は, シロアリとの接触がほとんど見られず, その活動に由来する蟻土に執着する傾向を持ち, シロアリ自体よりも蟻土との生態的関連性が示唆された.

特別講演要旨

(1) 琉球列島のホタルについて

大場信義(横須賀市自然博物館)

琉球列島には島ごとに固有なホタルが多種生息し、それらの生態・発光行動は各々特有であり、分布拡散経路・適応進化を探る上で重要な示唆を投げかけている。イリモテホタル *Rhagophthalmus ohbai* は西表島に生息するが、雌成虫は幼虫型であり発光部位や発光様式を行動目的によって劇的に変える。このような発光行動は世界で初めて確認されたものである。クメジマボタル *Luciola owadai* はその幼虫が水生であり、日本では第3番目の種である。幼虫は発生期を同調させるために亜熱帯における生活適応と思われる行動が観察されたほか、早朝に雌の一斉飛翔発光行動と集団産卵行動が確認された。雌雄の飛翔発光個体数比は5:10を境に急激に逆転した。西日本型ゲンジボタルの集団産卵行動はクメジマボタルの集団産卵行動の派生的な行動として考えることができる。現在、これらの遺伝的背景の比較研究を進めつつあるので近い将来に明らかにされよう。

◇『上野俊一博士退官記念論文集』の発行予定◇

すでにご承知かと存じますが、上野俊一先生が明年3月末日をもちまして、国立科学博物館を退官されることになりました。先生の多大な業績や普及活動に関してあらためて述べるまでもありませんが、本学会の財源を膨らませながら機関誌のElytraを今日のように立派に育てて下さいましたことに対し感謝する気持は会員皆同じところだと思います。

そこで、本学会に多大なご尽力をおしまれなかった先生の退官を慶祝し、『上野俊一博士退官記念論文集』を本学会の特別出版物として、明年3月下旬に発行を予定しています。内容は、先生の業績目録および生物学、洞窟学全般にわたる原著論文です。ただいま記念論文集編集委員会で編集・印刷中です。(妹尾)

◇甲虫ニュース原稿大募集◇

この12月号も12頁建てにしましたので、手持ちの原稿がまた始なくなりました。標本箱や四角紙の中に埋もれている貴重なデータを『甲虫ニュース』に記録して下さい。新分布地のみならず甲虫の生態・行動などの記録も重要と思います。投稿先：〒196 東京都昭島市昭和町 2-5-15-601 妹尾俊男宛

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00,0,1,2,3,4,5,6号、有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6
振替 00130-4-21129
電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)
FAX (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

◇会計報告◇

1. 1993年度決算(1993年1月1日~12月31日)

収 入	予 算	決 算	差引増減額
前年度繰越金	4,500,000 円	4,442,680 円	△57,320 円
会 費	2,400,000	2,717,000	317,000
広 告 費	80,000	120,000	40,000
出版物売上金	84,000	84,000	0
大会会場費	80,000	68,000	△12,000
雑 収 入	0	49,553	49,553
寄 付	0	300,000	300,000
合 計	7,144,000	7,781,233	637,233

支 出	予 算	決 算	差引差額
会誌印刷費	1,600,000 円	2,150,261 円	△550,261 円
(Elytra)			
会誌印刷費	400,000	502,896	△102,896
(甲虫ニュース)			
会誌送料	620,000	654,952	△34,952
通 信 費	200,000	243,316	△43,316
事 務 費	100,000	84,117	15,883
大会会場費	30,000	34,597	△4,597
予 備 費	50,000	122,127	△72,127
次年度繰越金	4,144,000	3,988,967	155,033
合 計	7,144,000	7,781,233	△637,233

2. 特別会計1993年度決算

収 入	支 出
前年度繰越金	905,884 円
利 息	1,636
出版物売上金	0
合 計	907,520
次年度繰越金	907,520 円
合 計	907,520

(会計担当、齊藤明子)

日本鞘翅学会

会費(一カ年)6,000円、次号は1995年3月下旬発行予定
 発行人 渡辺泰明
 発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1
 国立科学博物館昆虫第1研究室
 電話(3364)2311, 振替 00180-3-401793
 印刷所 (株)国際文献印刷社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥7,000, 桐合板製インロー型標本箱大 ¥2,500, 送料一箱につき都内及第一地帯: 4個以下 ¥1,600, 5個以上 ¥1,000 (以下同様), 第2地帯 ¥1,800, ¥1,100, 第3地帯 ¥2,000, ¥1,250, 其他, 各種器具, 針などを製作販売。カタログを御請求下さい。(¥80)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25
 電話 (03) 3811-4547, 振替 00160-7-113479